

## 藤村俊介 (チェロ) & 安田謙一郎 (チェロ)

### 曲目解説

#### F.クープラン (P.バズレール編) : 2つのチェロのためのコンセール

フランソワ・クープランが1722年に出版した《王宮のコンセール》(全4曲)は、ルイ14世の宮廷で毎週日曜日に催された演奏会のために書かれた室内楽作品。そして1724年には、続篇として《新しいコンセール》(全10曲)が出版された。この2作は通し番号で呼ばれることが多い。

この「2つのチェロのためのコンセール」は全5楽章からなる。「プレリュード」は明るく澁刺とした動きが魅力的。「エール」は愁いを帯びた旋律を聴かせる。「サラバンド」はゆったりとした気分に包まれ、「シャコンヌ」は典雅な気品に満ちている。以上の4曲はコンセール第13番から採られている。最後の1曲「私は知らない」は、《愛の肖像》というタイトルを持つコンセール第9番からのもの。愛がテーマとなっており、諧謔味のある快活さにあふれている。チェロ二重奏への編曲を行なったポール・バズレールは、パリ音楽院の教授も務めたフランスのチェロ奏者で、フルニエの師としても知られている。

#### J.S.バッハ : 無伴奏チェロ組曲 第3番

J.S.バッハの《無伴奏チェロ組曲》(全6曲)が書かれた年代は、ケーテンの宮廷楽長時代(1717~23)の前期と推定されている。各組曲は「アルマンド／クーラント／サラバンド／ジグ」の4つの舞曲を基本としながら、第1曲に「プレリュード(前奏曲)」を、ジグの前の第5曲に「メヌエット／ガヴォット／ブーレ」のいずれかの流行舞曲を置く構成になっている。

第3番の第1曲プレリュードは、16分音符が淀みなく流れるスケールの大きな音楽。第2曲は、軽やかな愛らしさを感じさせるアルマンド。第3曲は、音階的な分散和音とスラーで奏されるイタリア型のクーラント。第4曲は、典型的なサラバンドのリズムに旋律が勝っていく瞬間が美しい。第5曲ブーレは、演奏会用の小品として奏される機会も多い。第6曲は、終曲にふさわしい堂々としたジグとなっている。

#### ロッシーニ : チェロとコントラバスのための二重奏曲 (2本チェロ版)

1824年に書かれたこの曲は、長らく未出版のまま眠っており、再発見されたのは1969年のことだった。直筆譜を所有していたのは、銀行家でアマチュアの

チェロ奏者デイヴィッド・サロモン卿。伝説的なコントラバスの名手ドミニコ・ドラゴネッティと共演したいという彼の願いを実現するべく書かれた作品であった。したがって、その成立事情においても、高度な技巧的内容においても、この名手の存在が大きい。

第1楽章では2つの弦の掛け合いから、旋律と伴奏を交互に繰り返す。第2楽章は、特に伴奏のピチカートに乗せて朗々と歌われる旋律に、ロッシェニならではの美しさが際立っている。第3楽章は印象的な主題の背後で活躍する低弦の刻みが聴きどころ。

### **R.カリムリン：無伴奏チェロ・ソナタ 第2番**

本曲は1990年に作曲された単一楽章の作品。冒頭はレント、ルバートに始まり、次第に高揚感を得て、ソット・ヴォーチェへと至る。提示部のあとに続く三連音符をかたどった神秘的なリズムは、作曲家によれば「抗いがたい脅威を表す」という。中間部には銜いのない旋律が現れ、再現部からは加速度を増してコーダに至り、胸の痛みを吐露するように終わる。

### **R.グリエール：2つのチェロのための10のデュオ より**

レインゴルド・グリエールは、ソビエト初期の音楽界で指導的な役割を果たし、モスクワ音楽院において作曲科教授も務めた人物。本曲は1911年に書かれた作品で、小品10曲から構成されるが、今回はその中から4曲を選んで演奏する。

第1曲コモドは、ゆったりと優雅にたゆたうような音楽。第2曲レツジェーロは、16分音符のユニゾンが基調となっている。第4曲は重音での刻みが心地よい、躍動感あふれるヴィヴァーチェ。第5曲アンダンテは、旋律の美しさとハーモニーに心打たれる。

### **D.ポッパー：2つのチェロのための組曲**

ダーヴィット・ポッパーは、19世紀後半に活躍したプラハ生まれの名チェロ奏者で、作曲家としても数多くのチェロ曲を残している。本曲は1876年に書かれたチェロ二重奏のための組曲。

第1曲アンダンテ・グラツィオーソは、ゆったりとしたサロン風の甘美な旋律に始まる。第2曲ガヴォットは、長調と短調を繰り返してスラヴの香りを漂わせ、中間部では朗々と抒情を響かせる。第3曲スケルツォは、澆刺とした躍動感にあふれ、中間部の重音のハーモニーが美しい。第4曲ラルゴ・エスプレッシヴォは、陰のある情熱を秘めた旋律を歌う。第5曲は終曲にふさわしく、技巧が映える行進曲となっている。